

# 史跡

ひたちなか市

# 文化財MAP

ひたちなか市コミュニティ組織連絡協議会市民憲章実践部会  
ひたちなか市教育委員会



## ① 馬渡埴輪製作遺跡 (D-4) 国指定

5世紀末から6世紀に埴輪を製作していた工場の跡。地元中学生が埴輪を発見し、その後発掘調査を行ったところ、<sup>かまあと</sup>窯跡や工房跡等、埴輪製作の一連の工程が分かる遺構と工人達の住居跡が確認された。



馬渡埴輪製作遺跡出土埴輪 市指定



虎塚古墳出土品小大刀など 市指定



## ② 虎塚古墳 (E-5) 国指定

7世紀初頭に築造された墳丘長56.5mの前方後円墳。後円部に位置する横穴式石室は凝灰岩製で、壁面には白色粘土の下地の上に赤色顔料のベンガラで、幾何学文と武器や武具が描かれている。



虎塚古墳石室壁画

※カッコ内のローマ字と数字は、裏面の地図の位置を示しています。



## 埋蔵文化財調査センター (E-5)



ひがしなかね 東中根遺跡群出土土器 県指定



ちのこ 乳飲み児を抱く埴輪 県指定



うしろの 後野遺跡出土遺物 県指定



みたんだしいづかいかいづかどころ 三反田蜷塚貝塚土坑 出土土偶 市指定



おおぬままようづか 大沼経塚 出土経筒 市指定

市内の埋蔵文化財の調査研究や資料の収蔵をする施設。市内出土の考古資料や、虎塚古墳壁画の実物大模型などが見学できる。そのほか、考古学等の講演会や、年に数回の企画展を開催している。講演会等の申込み案内は、ひたちなか市報等でお知らせしている。

- ★開館時間：午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
- ★休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始
- ★入館料：無料
- ★駐車場：あり
- ★アクセス：ひたちなか海浜鉄道湊線 中根駅下車、徒歩約25分  
東水戸道路ひたちなかICより車で約10分
- ★問合せ：TEL 029-276-8311 ひたちなか市中根 3499

### ひたちなか市市民憲章

わたくしたちは、豊かな海と緑につつまれた自然の中で、文化の薫り高い世界にひらかれたまちをめざすひたちなか市民です。

- 1 自然を愛し 人にやさしい環境をつくります
- 1 スポーツや芸術に親しみ 笑顔のふれあうまちにします
- 1 たのしく働き ともに支えあう家庭をつくります
- 1 きまりを守り みんな仲よく助けあいます
- 1 未来と世界に目をひらき 人と文化の出あうまちにします

## ひたちなか市教育委員会総務課 文化財室

〒312-8501 茨城県ひたちなか市東石川2丁目10-1  
TEL 029-273-0111 (代表)

平成28年3月発行

# 名勝



みなとのきはん 水門帰帆 (G-6) 市指定

水戸藩第9代藩主徳川齊昭の選定した水戸八景の一つ。大理石（寒水石）に齊昭が書いた文字を彫った碑が建つ。



かんとうしょ ひ 観濤所の碑 (F-7) 市指定

当地の風景を写した刀の鏢に感動した齊昭が選定した景勝地。齊昭が書いた文字を彫った碑が建つ。

# 天然記念物



さかつらいそさき じゅそう 酒列磯前神社の樹叢 (E-7) 県指定

参道両側や境内に広がる常緑広葉樹が主体で、ヤブツバキの巨木が多く、タブノキやスダジイなども混交する特異な樹叢を形成する。

かなさ 金砂山の大ヒイラギ (E-2) 県指定

金砂神社境内にある樹齢400年とも600年ともいわれる巨樹。現在5株が生育している。

ぬまお 湫尾神社のスダジイ (E-3) 市指定

参道の南側に生育。幹周囲5.3m、樹高23mを測り、樹齢は400～450年と推定される。樹勢・枝張りもよく市内最大のスダジイである。

ぬまお 湫尾神社のヒイラギ (E-3) 市指定

参道北側に生育。幹周囲2.5m、樹高14mを測り、樹齢は250年と推定される。根本から2mほどまで幹の一部が空洞になるが樹勢はよい。





3 十五郎穴横穴墓群 (F-5) 県指定

古墳時代末期から奈良時代に、凝灰岩を掘り込んで築かれた横穴墓群。これまでに約280基が確認され、総数は300基を超えると推定され、東日本最大級の横穴墓群と考えられている。



4 那珂湊反射炉跡 (G-5) 県指定

安政4年(1857)に完成した水戸藩営大砲鑄造所。オランダの技術により大型金属溶解炉が2基建設され、約20門の大砲が鑄造された。元治甲子の乱(1864・天狗党の乱)で破壊されたが、昭和12年に模型が復元された。



5 川子塚前方後円墳 (E-7) 市指定

5世紀後半に築造された、市内に現存する最大の前方後円墳。墳丘長80m、後円部直径及び前方部幅がともに約41m、墳丘の高さ約9m。葺石と埴輪が確認され、埴輪は、馬渡埴輪製作遺跡から供給されたと考えられている。



6 賁賓閣跡 (G-6) 市指定

水戸藩第2代藩主徳川光圀の命により、元禄11年(1698)に建てられた水戸藩の別荘で、賁賓閣とは、接待所や迎賓館の意味を持つ。建坪約300坪、30以上の部屋があり、高低2段の構造。元治甲子の乱で破壊され、明治時代に入り湊公園として整備された。



7 文武館跡 (G-6) 市指定

水戸藩第9代藩主徳川斉昭が建設した敬業館に、武館の機能を加えて移転し、「文武館」となる。小川・潮来とともに郷校三館と呼ばれたが、尊王攘夷運動の拠点となり、元治甲子の乱で焼失。



8 比観亭跡 (E-7) 市指定

写真左は五世夜雪庵金羅の碑  
水戸藩第6代藩主徳川治保が寛政3年(1791)に風光明媚なこの地に東屋「比観亭」を建てさせた。

9 寺前前方後円墳 (F-5) 市指定

墳丘長は約50mを測る市内最古級の前方後円墳。柳沢台地先端部の地形を利用して築造されている。

10 飯塚前古墳 (F-4) 市指定

墳丘が長辺30m、短辺20mを測る市内唯一の長方墳。三反田古墳群飯塚前支群で墳丘の残る唯一の古墳。

11 首塚(忠勇戦死之墓) (F-6) 市指定

元治甲子の乱が茨城県下で繰り広げられ、天狗党は最後の拠点として那珂湊に集結。部田野原では3度の大会戦が行われ、この際の戦死者の亡骸を葬った地。地元の人々が供養のため石碑を建てた。

12 福島藩士の墓 (E-4) 市指定

元治甲子の乱の戦死者である福島藩士12名、中間4名の亡骸を葬った地。

13 宇都宮藩士の墓 (C-2) 市指定

元治甲子の乱の戦死者である宇都宮藩士9名、役夫2名の亡骸を葬った地。

14 水車場跡 (G-5) 市指定

反射炉で鑄造された砲身を水車の力で内削し仕上げを行った施設。錐入れ場とも呼ばれる。元治甲子の乱で焼失。

15 多良崎城跡 (B-5) 市指定

旧真崎浦を望む市内最大級の中世の城館跡。半島状の地形を利用して築かれ、土塁・堀跡・烽火台などが良好に残っている。



# 建造物



18 山上門 (G-5) 市指定

水戸藩江戸小石川邸に設けられた勅使奉迎用の門。門の形式は薬医門。昭和11年現在地へ移築。



19 正徳寺の門 (G-5・6) 市指定

水戸藩典医の屋敷門で、水戸市内から昭和46年に現在地へ移築。安政7年の棟札が残る。幕末の天狗党の乱の際に戦火に遭い、その痕跡が残る。



24 平磯白亜紀層 (F-7) 県指定

中生代白亜紀の末ごろ(約6500万年～7500万年前)の地層。圧力によって押し曲げられ、地層全体が北東に向かって傾斜している。その後、波によって侵食されて、のこぎりの歯のような形になった岩が海岸に並ぶ。アンモナイトの化石が産出する。

25 湊御殿の松 (G-6) 市指定

水戸藩の別邸養賓閣の庭に徳川光圀が須磨明石(兵庫県明石市)から取り寄せ植えたといわれる黒松。12株が残る。

26 素鷲神社の大ケヤキ (C-5) 市指定

素鷲神社本殿裏にあるケヤキの巨樹。樹高23m、幹周囲約6mを測る。

27 足崎のイチョウ (C-5) 市指定

幹周囲6.5m、樹高28m、樹齢500年と推定される。市内最大のイチョウである。

28 高野のケヤキ (B-4) 市指定

幹周囲6.4m、樹高29.5mであり、樹齢は400～450年と推定される。枝振りがよい。

# 工芸品



29 華蔵院の梵鐘 (G-5) 県指定

銘文によると暦応2年(1339)に源義長の発願により圓阿が製作した梵鐘。総高117cm、口径68.5cm。もと松沢村(現:常陸大宮市)の淨因禅寺の所有で、幕末に那珂湊へ運ばれた。

武田氏館 (E-3)



武田地区は、甲斐武田氏の発祥の地であり、これを広く知らせるために整備された施設。鎌倉時代の地方豪族の住居を再現。

主屋は主殿造で、厩、納屋を整備し、主屋には甲斐武田氏発祥の関係資料を展示。



- ★開館時間: 午前9時～午後5時 (入館は4時30分まで)
- ★休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
- ★入館料: 無料
- ★駐車場: あり
- ★アクセス: JR常磐線勝田駅より徒歩20分  
茨城交通バスで「武田本町」下車徒歩約10分  
東水戸道路ひたちなかICより車で約20分
- ★問合せ: TEL 029-276-2525 ひたちなか市武田 566-2

# 文学碑

那珂湊は明治時代以降、保養地・別荘地として多くの文人墨客が訪れた。市内には多くの文学者の歌碑・文学碑がある。

30 与謝野晶子・小山いと子文学碑 (G-6)



養賓閣跡の碑の南西にあり、与謝野晶子の和歌と、小山いと子の小説「海門橋」の一節が刻まれた碑。

31 国木田独歩文学碑 (G-6)

国木田独歩は明治期の文学者。明治40年に療養のため、那珂湊に滞在し、短編小説「渚」を書いた。碑には、「渚」の一節が刻まれている。

